

<詩>椋鳩十のこと

鈴木, 和雄

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

1989-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019569>

棕鳩十のこと

鈴木和雄

動物園の檻の前に

うづくまっている青年

檻の中にはペンギンが

よちよち歩きをしている

青年はペンギンを見ていない

何か別の思考にふけている

そんな姿がわたしの印象にある

その名は久保田彦穂

わたしなどよりもっと適切な学友が

とも思うがどう考えてもそれらしい姿がない

わたしも当時は廊下とんび

登校はするがあまり教室には姿の無いくち

彼はどうだったのか

机を並べての授業は記憶に無いほど

しかし、かれの印象は何か残っている

それは卒業後賀状のやりとりを見ても

随分長いこと続いていた

卒業すると直ぐ鹿児島の高女に就職

したがって私は彼が国へ帰えったとばかり、長いこと思っていた

それほどふしぎな行動ともみえる

有るとき山窩ものでデビューしていた

当時三角寛が盛んに手掛けていた

特殊の小説である。おや彼もまた

というおもいがあった

しかし、それはそれでほりさげてゆけば

そんな感慨があとを引いていた

それがいつのまにか

今度は児童文学としてあらわれた

豹変、まさに転身の速さ

いったいどちらがジキルとハイドなのか

学友として懐かしい

しかしほんやりものわたしには

いまもってわからない

(一九三一年卒)